
真剣で私と戦いなさい!!

御手洗団子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私と戦いなさい！！

【Nコード】

N4821X

【作者名】

御手洗団子

【あらすじ】

昔、川神学園に子連れ武道娘、西園寺あやめがいた。実力は武道四天王すらも凌ぐ武術の達人であった。その息子、西園寺伸二が川神学園に入学を果たす。亡き母の過ごした学園生活を自分で体感するために

PROLOGUE

「お前に教える武術は人を傷付けるモノではない。力無き者を助ける術である」

幼い頃から母が言っていた口癖の一つだ。今は亡き母の言葉。俺はそれを信念として貫き通している。

物心がついた時から母と一緒に鍛錬をしていた。戦う為でなく、誰かを護るためと。

毎日の修業は、とても苦しかった。毎日毎日同じことの繰り返し、反復練習をするのみ。

実践と称して数々の不良達と戦ってきた日々。そのおかげで刃物や武器に対する対処法が自然と身に着いた。

いつしか俺は川神を中心とする不良グループのカリスマ的存在へと昇華した。

『孤狼の伸二』。一人で川神の不良グループを潰してきた俺に、そんな渾名あだなが定着した。

十二歳で不良から川神連合の最年少総長として崇められたが、初任一日で降りた。理由は他人が勝手に決められたから。まあ頼まれてもなりたくないが。

それ以降も俺は戦いを求められたり舎弟にしてくれと懇願された。しかし全部丁重に断った。

それ以降も母との鍛錬は続いたが、そう長くは続かなかった

中学三年の夏。母は余命三ヶ月と宣言された。

母は豪快に笑った。喜んだ。

「そうか。私はまだ三ヶ月息子と過ごせるのか!!」

俺は複雑だった。病気でもない俺にとつては、あと三ヶ月。一日一日が長く、そして刹那の如く時が進んだ。

産まれながら身体が弱かった母は、実は産まれた当初は余命五年だった。

それが十歳、十五歳、二十歳、二十五歳、二十八歳まで伸びて、今に至る。

「人生は早い。特に私は。だから何でも早めに済ませておいた」

俺を産んだのが十三歳。大体今の俺と同じ年で俺を産んだ。

一回り年上の父と駆け落ち同然で結婚して、身体を強くする為に武術を嗜む母は子連れ武士娘として学園に通う波乱万丈で濃い人生を送った。

三か月後、今まで俺と共に武術を極め求めた母は、もういなかった。

最後の時まで俺と鍛錬をしていた。母が病室で寝ている最中でも、傍で母から見えるように。

俺は人生に絶望を感じていた。今まで辛い鍛錬やボコボコに殴られることはなくなったが、途轍とてつもない喪失感が襲う。

そんな時、海外出張中の父である西園寺時隆さいおんじときたかから連絡が来た。

母が過ごした学園へ入学してみないか、と。

俺は悩みに悩みぬいて、準備を整えた。学園へ入学する準備を。

2009年春　俺は川神学園へ入学を果たした。

PROLOGUE (後書き)

皆様初めまして、御手洗団子でございます。

来年一月発売まじこいSに繋がるようにストーリー展開をします。

なので殆どがオリジナル展開で、たまに原作に介入します。

8：2ぐらいの割合でしょうか。

あとついでにヒロイン募集も致します。

原作ヒロインの○○○をヒロインに！ オリジナルヒロインを考え

たので良かったら使ってください！ など。

あと感想もお待ちしております

それでは次回お会い致しましょう。

第一話 人生二人目の敗北

四月五日の日曜日。入学式が明日に迫る本日夕方、俺は鍛錬兼川神学園へのルート確認の為ランニングをしている。

息が上がり、足が重く、脳がフワフワした感じになる。入学式が楽しみで結構飛ばし過ぎたかな？

それでも俺はスピードを緩めない。それよりスピードが速くなる。楽しみだ。母が人生で最も楽しんだ場所である川神学園でどのような出来事が起きるのか。

俺の自宅から全速力で走り続けて三十分。全速力で走って来たので汗がダラダラ、喉はカラカラ、足はガクガク、けれども俺は平常心を装い顔を上げたまま荒く空気を取り込む。しかし、ようやく川神学園前に到着した。

目の前には大きな門が立ち憚^{はば}つて中の建物が見え辛い。残念。入試試験は試験直前まで教科書に目を通し、受験が終わったら頭が真っ白になり建物をよく見ていなかった。

今日はじっくり内装を見ようと思ったが、この分だと内装は明日のお楽しみ。今日は帰って飯作るか。

俺は学校の周りをジヨギング程度のスピードで走りながら学校を観察。今日の観察で分かった事は、川神学園が普通の学校と比べて大きいという事だけ。他に特別凄い所は見当たらない。

一周走り終わった俺は川神学園の校門の前に立ち、これから通う学

び舎に一礼。

バツと顔を上げ川神学園に背を向け走り出そうとしたら、目の前に髭の長いお爺ちゃんがいた。

「ほう。中々良い目をしているのう。どこかで見た目じゃ」

この老人、見たことがあるというか、最近見た。学園のパンフレットで。ていうか、

「が、学長?!」

「そうじゃ。わしはその学園の学長を務める川神鉄心じゃ。君、新生かのおう?」

「はい。明日からこの学園に入学します、西園寺伸二です」

俺の名を聞いた直後、学長は合点がいった、ような表情を浮かべた。

「なるほどのう。彼女に似ているかと思っていたのじゃが、君があやめの一人息子か」

ほっほっほっ。と突然笑う学長。

「学長、母を知っているんですか?」

「当たり前じゃ。十数年前の川神学院を牛耳っておった子連れ武士娘を知っていない方が可らしいわい」

俺の耳にとんでもない情報が入って来た。母が、川神学園を、牛耳

っていた？

「ん？ なんじゃ、実の母の武勇伝を知らんのか」

「は、はい。恥ずかしながら、母から聞いておりませんでした」

「まあ、彼女は自分の強さを他人に見せびらかすような愚かな真似はせんからな。実の息子に教えんのも納得じゃ」

学長から聞くと、俺の母親はとんでもない有名人らしい。武道をしている者ならば、一度は聞く名前だと。

かの有名な武道四天王の内二人を一对一の戦いで葬り去ったと（実際には死んでいない）。他にも人を助けるために武術を極めていたと。

「……このぐらいかの。細かく言えば色々あるのじゃが、わしも忙しい身なのでな。この辺で失礼する」

「はい！ ありがとうございます！ これからよろしくお願いします！！」

学長は「ルーに良い土産話が出来た」と軽い足取りで学園内へ向かった。

俺は学長を見届けてから家へ帰る事にした。

俺は家でシャワーを浴びて汗を洗い落とす。家は一人暮らしのマン

ション住まいで、海外出張中の父からの少ない仕送りと日雇いバイトでなんとか生活費を賄まかなっている。

学生に大金は持たせられぬと父は毎月家賃と別に十万円の仕送りをしてくれる。実際十万円で生活費は足りるが、趣味のお金は自分で稼いでいる。必要な時に稼げるので日雇いが一番効率が良い。

浴室から自分の部屋へ戻ると、ケータイが震えた。メールが着信したようだ。

送り主は鈴木からだ。メールの内容は、とある女性に追われている。追いつかれるのは時間の問題、助けてくれと。

俺は一万円な、と返事を出すと、三秒後に返事が返ってきた。ついかマンションにチャイムが響き渡った。

『助けてくれ！ 早く、早く開けないとアイツが来る！！』

仕方なくマンション一階の共用玄関を開いて、俺の部屋へ招き入れる。

鈴木は肩で息をしながらリビングで座り込んだ。

「た、助かったぜ伸二。しばらく匿かくまってくれ」

「その前に一つ質問。誰に、どうして追われたんだ？」

「は、話さないと駄目か？」

「当たり前だ。前にお前が原因で俺まで補導されそうになったる？」

鈴木は黙ってしまった。表情で分かる。こいつ、犯罪を犯して逃げて来たな。

「追っているのは誰だ？ 警察？ それとも」

「し、知らねえよ！ 取引の最中、突然アイツが」

「取引つて、なんだ？」

やっちまったと鈴木が顔を俯うつむかせた。どうやら本当に犯罪を犯したのか。

「チャンスをやる。ここからさっさと出て行け。でないとお前をぶん殴る」

「止めてくれ！ せめて、せめて警察を呼んでからにしてくれ！ アイツには、アイツにだけには捕まりたくねえよ……」

泣きながら俺に警察を呼んでくれと頼みこむ鈴木。しょうがないから警察を呼ぶのに備え付け電話を取り、11と押し、最後に0を押す瞬間、彼女が窓を突き破って入って来た。

「き、ききききききたー！ー！」

鈴木の前に、一言では言い表せない美女が毅然きぜんとした姿勢で立っている。

腰まで伸びた艶やかな髪、猛禽類を思わせる瞳を持ちながら、それを引き立てる各部分。モデル並みの身長とグラビアモデルにも負け

ない豊満なボディ。

俺は正直、見惚れていた。

鈴木を一蹴りで沈黙させる姿までが、まるで芸術品のような美しさを持つ女性。俺は彼女が俺に攻撃を仕掛けるまで見惚れていた。

「川神流無双正拳突き　　！！！」

見た感じぶつちやけ速いストレートパンチだった。

俺は襲いかかって来た女性の手首を掴んで背負い投げに持って行った。

「!?!」

女性は油断していたのか受け身を取らずに背中から落ちた。怪我はしていないだろうが、常人ならばらく悶え苦しむ程の痛みを受けただろう。

「ほう。貴様やるな。ただのクズではなさそうだ」

いやまあ母から武術を習ったしなあ。これぐらいは当然だ。

「なんか誤解しているようだが、俺はそいつの仲間ではないぞ?」

「嘘を吐くな!　貴様が黒幕だと、他の仲間から情報は貰った。観念して肅清を受けるんだな!!」

いやいや。仲間って、俺一人も仲間だと思ってる奴いないし。

「オラオラオラオラ！！」

女性が先程のストレートパンチより若干遅いパンチの連打を仕掛ける。右頬、鳩尾、左わき腹などランダムにパンチが放たれる。俺は一つ一つ手の平で流すように連打を捌く。

連打のスピードを緩めずに突然右足が俺の顎を捉えたが、俺は紙一重で後方に避ける。

多分実力は俺より上。護りに徹しているので攻撃は避けられるが、攻撃の隙がほとんど無い。ま、例え攻撃が出来たとしても女性を殴ったりしないけど。これ母の遺言。女性はどんな理由でも暴力を振るうべからず。

「これを避けるか！ 良いぞ良いぞ！！ 血が沸いてくる！！」

女性は次々と多種多様な攻撃を仕掛けるが、俺には見える。だが身体が着いて来ない。段々精神と身体が引き離される。

一つ、また一つと軽いダメージを負う。これでは俺の根負けで最後には大ダメージを受けてしまう。逃げ出そうにもここは五階だ。玄関から逃げるにしても鍵を開けている間に女性の攻撃が来る。飛び降りるなんて以ての外。上手く飛び降りても足へのダメージで俺が動けなくなり、この女性が追って来てゲームオーバー。

「楽しかったぞ！ 残念だが、これで終わりだ！！」

女性は俺との距離を置いて、力を溜める。

「はああっ！！！！ 川神流奥義、ルビーオーバードライブ 紅色の波紋！！！」

俺の腹部を中心に女性の正拳の衝撃が、頭先从指の先まで隅々まで行き渡る。

今日は初めて母以外の人物に負けた、クソつたれな一日となった。

第一話 人生二人目の敗北（後書き）

今日テストなのに、何やってるんだろう、俺。

息抜きと言ってネットゲをやって数時間、終いにはプロローグだけで終わるはずが一話まで書きちまった。

まあ、赤点取らなければ良いやwww

ではまた次回、更新の時に会いましょう！

第二話 入学式の朝（エロゲ展開あるよ！）

「久しぶりに他人の家で寝たなあ」

俺は謎の女性に謎の必殺技を喰らって和風の部屋で寝ていた。

俺は記憶の中では初めてベッドじゃない布団で寝た。意外と寝心地が良い。それと畳にも匂いがあるんだな。結構良い匂いだ。

兎に角謎だらけだ。少なくとも、あの女性が川神流との関係があるという事だけだ。

腹部のダメージは、まだ癒えていない。こりゃあ完治まで数日かかるな。

だが動く事はできる。どこだか知らないが、さっさと家に帰るか。

あー、確か鈴木が逃げ込んだ所^{せい}為で、俺が鈴木達の黒幕ってあの女性^{せい}が思い込んでいるよな。

ここがもしあの女の自宅なら、逃げてもすぐに捕まるだろうな。

拘束が何一つされていないし、ドアも鍵が掛かって無い事からこの家の中は自由に動けるはず。

一^{ひと}先ず俺は着されていた浴衣を脱いで布団の横にある、俺の私服に着替える。ご丁寧^{ごていねい}に下着まで脱がされていた。

裸になってパンツに片足を入れた瞬間、障子がスーッと開かれた。

「君、起きた

」

「……………」
……………整理しよう。

障子の向こうにはポニーテールの可愛らしい少女がブルマ姿で立っていた。しかも薄ら汗で服が肌に張り付いて少し色っぽい。いや、胸が無いから全然色っぽくない。せめて謎の黒髪ロング女程の胸だったら良かったのに。

今気付いた。俺はポニーテールの彼女の前で裸だ。

彼女は俺の朝だから元気になった男のシンボルを凝視している。

「ぎゃああああああああああああ！」ポニーテール。

「キヤーーーーー！！」俺。

俺は空気を読んで乳首と男のシンボルを隠す。しかし、大きくなつたシンボルは俺の手で隠しきれない。

「エッチ！ この変態！ 男の部屋に入る前はノックをしてって言ったでしょ！！」

男女逆転。俺はその場のノリだけでそう叫んだ。誰得だよ、俺の裸とか。

「どうした一子！ 一体なにが

」

なんという事でしょう。まさかあの謎の黒髪ロングの女性が来るとは思いもありませんでした。

黒髪ロングの女性は右手に力を溜めるモーションを起こした。

「ちょっと待て！ 俺はただ、着替えをしていただけ」

「ふんっ！」

俺の鳩尾に的確なストレートパンチを問答無用に叩きつける黒髪ロング女性。

「お姉さま、怖かったわ！」と涙を流して謎の女性に抱きつくポニテール。

「貴様、まさか一子を襲うとはな」

「お、……おそ、つて、ねえよ……。着替え…中に、とつぜ、んは
いって……来たんだ」

うえっ。胃液が喉から込み上がってくる。昨日の晩から何も食べてないのが救いだ。何とか逆流する胃液を抑え込める。

「いいか、私達が出て行って1分以内に着替える。していなければ、
あとは分かるな？」

そう言って二人は部屋から出て行った。

くっ、鳩尾殴られて力が入らない。それに空腹や昨日のダメージが

付いて上手く身体を動かせないのに、アイツ無茶な要求しやがって。せめて下だけでも着ないと、アイツに殺されかねない。

パンツズボンを履いて、上のシャツを着ている最中に一人、黒髪ロングのアイツが入って来た。

今度は何をされるかと身構みがまえてたら、彼女は大人しく俺の前で正座した。

「昨日はすまなかった。この通りだ」と頭を下げる。

「勘違いでお前とあの部屋をボロボロにってしまったのは、反省している」

潔けいい。そして正直者。俺が彼女に感じた彼女の内面だ。

「いや、俺こそ犯罪者を匿たかくっているような真似をしたんだ。疑われてもしょうがないよ」

「言い訳ではないが、私達は、あの鈴木達の罠にはまったんだ。君を黒幕に仕立て上げて、私や一子を君と戦わせて助けて貰う作戦だったらしい」

俺が寝ている合間に誤解が解けていて良かった。このまま鈴木達と道連れに逮捕なんてされたら堪たまらない。

「あの、鈴木達は何をしていたんです？」

「麻薬の密売だ。最近出始めたドラックのユートピアを密売してい

ただ」

「麻薬つて、鈴木達は今、」

「警察だな。今頃カツ丼でも食べてるんじゃないか」

はあ。これで鈴木達のボディガードのバイトは潰れたな。アイツ等クズだったけど、金の支払いは良かったのに。

「話を変えるが、君は近くに親戚の家や親しい友人は？」

「いや、いませんけど。どうしてです？」

彼女は実に申し訳ないという表情で、ある事実を告げる。

「昨日の私との戦いを憶えているか？」

「ああ。俺が防戦一方だったやつね」

「それで、マンションの修理期間が1カ月かかるんだ」

「修理？」

「憶えてないのか？ 私の最後の攻撃で、リビングの壁や床の至る所にヒビができてしまったんだ」

マジか。つーか俺良く生きているな。

住む場所か、どうしよう。このままだと野宿決定だ。マンションを借りるにしても未成年者一人で借りれるのか？ 保証人が必要なら

海外出張中の親父は無理。福島に住む叔父叔母を呼ぶしかなさそう
だ。それでも叔父や叔母にだって用事があるんだ。すぐに来れる訳
でもないし。

「君が良かったら、川神院に住まないか？」

「川神院、てあの川神院？」

「そうだ。私は川神百代^{かわかみ ももよ}。川神院のトップである川神鉄心の孫だ。
君を期間限定の門下生として川神院に入るようにジジイには伝えて
おく」

成る程。俺が手も足も出なかつた理由が分かった。話なら聞いた事
がある。川神百代と云う最強の武神が川神市に存在すると。初めて
肉眼で見た。ならばここは川神院のどこかの部屋か。

川神百代の言う通りここに住ませて貰おうかな。親父から一カ月
の家賃代を誤魔化^{ごまか}せる。

「えっと、よろしくお願いします」

「ああ。よろしく。君の名前、聞いてもいいか？」

そういえば自己紹介がまだだったな。

「俺の名前は西園寺伸二^{さいおんじ しんじ}。川神学園一ね、ん……………ああ！ 百代
さん！ 今何時ですか?!」

「今は八時半頃だぞ」

「入学式は九時半だから、このままだと遅刻だ！ すいません！
俺学園に行つてきます！！」

俺は着の身着のまま川神院を飛び出した。

まずは家に帰って制服を取りに行かねば。流石に私服で登校は駄目だ。

て、

「靴はどこだ！？ つーか川神院広っ！」

結局川神院を出たのが九時前。家に戻って着替えるので九時十五分。川神学園へ着く頃には既に十時を回っていたとき。

第二話 入学式の朝（エロゲ展開あるよ！）（後書き）

テストの手応えを全く感じなかった御手洗団子です。

もう寝不足で私の頭も狂っていたんでしよう。

数学テスト前の休み時間、私は誰かクラスメイトを道連れにしよう
と決心していました。

数学の公式を暗記しているI君の耳元で、『このー木、なんの木、
気になる木』と歌ってやりました。

案の定、私が思い出し笑いをして、試験監督の先生に殴られました。
つられてI君も笑って結果オーライでした。

では、次回の更新の際にお会いしましょう！

第三話 眠れる河川敷のお姉さん Part 1

諦めた。だって入学式の途中で割り込む勇氣はない。

だからと言って川神院に戻るにしても、気まずいだろう。しょうがないので多摩川の河川敷をコンビニで買ったパンを頬張りながら一人トボトボ歩く。

初めて多摩川の河川敷に来たが、中々の広さだ。鍛錬をするには持つてつこいだな。今度からここを拠点に鍛錬を積むか。

河川敷を海側に向かって歩く。

しばらくすると、一人の女性が倒れていた。

行き倒れか、と女性に駆け寄る。

女性の顔を覗き込むと、行き倒れでも何でも無く、ただ寝ていた。

女性が無事なのを確認して安堵あんどの溜息を吐く。

それにしても、この女性は身長や胸や尻など色々と大きいな。身長は俺より若干大きいかな？

……ま、まだまだ俺は成長途中だし！ すぐに追い抜くさ！

このお姉さん、幸せそうに寝ているな。俺も百代さんから受けたダメージと疲労で眠い。パンを食べてある程度腹も膨ふくれたし、俺も寝るか。

お姉さんから数m離れた場所で俺も横になる。

背中は草でチクチクするが、それ程不快にはならない。むしろ太陽の温かさ与时折吹く風ときおりが心地よく、俺の眠気を刺激する。

視界の隅で黒い物体が動いた。目線を移動すると、黒猫が俺に擦り寄って来た。

俺は何の抵抗もしないでいると、黒猫は俺の腹の上によじ登った。平然と俺の腹の上で丸くなる。黒猫は絶好のベッドを見つけたようだ。

俺も黒猫に続いて深い眠りに落ちた。

腹が少し動いた。

どうやら黒猫が目を覚ましたようだ。

俺も薄く着いた目脂めやしを擦り落とす。

ちよつとした違和感が俺を襲う。寝る前は草でチクチクした頭の裏が柔らかな感触に包まれていた。

目を開けると、俺の隣で寝ていたお姉さんが、俺を膝枕ひざまくらして寝ていた。

「……………えっ?!」

驚いた。二重の意味で驚いた。

まず一つは他人である俺を膝枕する事、もう一つはその状態で寝ている事だ。この状態でよく眠れるな。

「ZZZ ZZZ」

こんな体制で寝られるな。ていうか顔が近い！

良く見ればお姉さんは結構な美人だ。途端に心臓の鼓動が速くなる。今まで女性にこれ程の至近距離で触れられることは無かった。当然の反応だよな？

どれほど時間が経ったであろう。数分か、或いは一時間以上俺も二度寝をしていた。

不意に頭を撫でられる。目を覚ますと、さっきのお姉さんが幸せそうな顔で俺を良い子良い子してた。妙に照れくさい。

「や」

「……おはようございます」

俺が起きてるのが分かると、頭から手をどけた。

「ごめんね。勝手に膝枕しちゃって」

「いえ、別に大丈夫ですよ。俺も気持ち良く眠れたし」

「そう？　ならよかったあ」

そういいまた俺の頭を撫で回す。

「うふふ」

「？　何が可笑しいんですか？」

「いやあ、君みたいに大人しくて可愛い弟が欲しいなあ、と思って年上と思われる女性に、可愛いと言われたのは初めてだ。可愛いと言われたのに、全然嫌じゃない。むしろもっと言われたいくなる。」

「ウチの弟って、ヤンチャでそんなに年離れてないからさあ。君ぐらい年下で可愛い弟が良か……zzz」

って、寝てるし。俺の頭が女性の手でロックされてる。これでは動けない。……いや、この女性の力が強くて離れるにも離れられない。母と百代さん、それにこのお姉さんといい、知らない間に日本の男女の力が逆転したのか？

「……んあ、ごめんごめん。これじゃあ帰れないよね」

はい、と頭から手を放すお姉さん。このまま寝るわけにもいかない。ので体を起こす。

「……って、良い場所だね。昼寝には最適だよ」

「そうですね。俺も良いと思います」

「芝生が布団代わりになってねえ……」

そう言っただけ瞳を閉じるお姉さん。どっただけ眠いんだよ。

「……げっ、もう3時半かよ」

軽く五時間も俺とお姉さんは寝ていたのか。お姉さんに至ってはそれ以上だな。

「もう行くの？」

「起きてるのか寝ているのかハッキリしてください……」

正直このお姉さんの思考回路が分からん。会話をしたいなら起きろ。寝たいなら寝ろ。

「お腹が空いたんで俺は帰ります」

「そう。私はもう少し寝るね。また会おうね」

「はい。また会いましょ、……もう寝てる。」

お姉さんは豪快に大の字で睡眠を始めた。今度こそ本当に寝ただろう。

俺は遅めの昼飯を食べに繁華街へ向かう。

第三話 眠れる河川敷のお姉さん Part 1 (後書き)

タイトルにPart 1と入れましたが、次の更新には続きません。

名前は敢えて出しませんでした。板垣辰子の登場回です。

にじファンで板垣辰子の検索結果が0で驚きました。

にじファンのまじこい作者は辰子があまり好きではないのですかね。

では次回、『伸二、初めての川神学園(仮)』でお会いしましょう
!!

第四話 百代の罰と報い

勘違いで伸二の家をボロボロにしてしまった次の日の夜、川神百代は祖父である川神鉄心に呼び出されていた。

「モモよ。お主、一般人に暴力を振るつたな？」

「はい、申し訳無く思っています」

普段は鉄心の前では高圧的な態度を取る百代だが、今夜は違つ。百代も自分で犯した罪を認識しているのだ。

「いくら敵の誤情報に振り回されたとしても、例え罪人に奥義を使うのはやり過ぎじゃ。しかも誤つて何の罪も無い一般人に奥義なぞ言語道断。反省せい」

「はい。彼の家^の修理代は、私が払います」

「そんなの当たり前じゃ！ それだけでは罪滅ぼしにすらならん。一つ聞くが、何故奥義^{なせ}を使った、いや使わざる追えなかつた？」

「最初は奥義を使用するつもりは在りませんでした。しかし、彼が想像以上に強かったのでテンションが上がり、彼を確実に倒すには川神流奥義しか無いと思っていました」

「奥義を使わなくとも、お主の力量^{リキカキ}なら使わなくとも勝てただろう？」

「はい、その通りです。言い訳するつもりは在りません」

鉄心は大きなため息を吐き、ツルツルな頭を一掻き二掻きする。鉄心の口から、百代にとって衝撃的な言葉が発せられる。

「川神百代。本日この時間を以って、西園寺伸二の家が修繕されるまで、一切の戦いを禁ずる」

「なっ?! そんな!」

「勿論挑戦者が来たとしても、話すな、目を合わせるな、触れるな、戦うな。これは絶対じゃ」

百代は驚愕した。ある程度の罰は予測していたが、まさか戦いを禁止されるとは予想になかった。精々修理費だけを出しとけば問題無いと、そんな軽い考えをしていた。

「今後の登下校の際はルーを監視役にする。挑戦者はルーに相手になってもらう。場合によってはワシも相手をする」

驚く百代を余所に、鉄心は更に厳しい条件を増やす。

「修理代も、己が働いた金で出すように。他人から借りた金を使ってもいかん」

「……くっ、わかった」

「これらの条件を修理終了、つまり一か月後までに全て完了しなかった場合、お主の力を封じる。覚悟しておけ」

「力を、封じる……」

百代は聞いた事がある。昔、川神院師範代で百代の師匠であった釈迦堂刑部やかとうけいぶという禍々しい力を持った者を、破門の際に悪行へ力を使わせないために、鉄心は釈迦堂の力を封印しようとしたが、寸すんでるところで川神院を逃げ出したと。

「今後は良く考えて行動するように。あと最後に。伸二に伸二が納得する罪滅ぼしを自分で考え、自分で行うおこなように。これも前の約束の期限以内に達成しなければ、やはりお主の力を封印する」

百代は苦虫を潰したような表情を見せるが、反論することはできないので全ての条件を承諾した。

「先に言っておくが、伸二に直接聞くのも駄目じゃ。自分で考え、誠意を込めて、伸二が納得する罪滅ぼしを考えよ。不正なぞ伸二やお主の親しい仲間に訊けば丸解まるわかりじゃ」

何も言い返さずに「失礼します」と百代は悔しそうに鉄心の部屋を後にする。

「……まさか百代に奥義を使わせるとわ。しかも二日ではぼ完治させる身体能力。未恐すえおそろしいのう、あやめの息子は。いやはや流石さすがと言った所か」

ほっほっほ、と鉄心の笑い声が部屋に響いた。

「十年前と同じよう、現代いまでも西園寺家の血を周囲に振る舞うのう。以前のあやめのように」

第五話 不良Sの悲劇

川神院は結構過ごし易い。お風呂もデカくてゆっくり入れるし、飯も美味しい。

晩御飯を食べ終えて三十分後、俺は青色が主体のアディダスジャージを着用。これが俺の鍛錬着。何故アディダスかって、デザインが気に入ったから。

川神院の玄関先で足を中心に入念なストレッチを行う。

ストレッチが終わり、最初はジョギング程度のスピードで走る。徐々に走るスピードが速くなる。足が温まって来た。このままノンストップで多摩川まで走り続ける。

多摩川に着くと、先客がいるようだ。遠くて暗いのでシルエットでしか見えない。なにやら細長い棒、槍を振り回している。

いや、槍は綺麗な弧を描きながら宙を舞っている。使い手は中々の槍使いだ。

俺は槍使いが気になったが、鍛錬を始める事にした。

腕立て伏せ、腹筋、河川敷階段ダッシュ、逆立ちで歩いたりして身体全体の筋肉を刺激する。

一通り体を虐めてから、母から習った武術の型を確認する。

ある程度疲れた状態で型を確認しないと実践では役に立たない。疲

れている時は勿論、怪我をしても技を繰り出せないのは敗北したと同じだ。これはスポーツ全般に言える。

ラグビーが良い例だ。ラグーマンは尊敬に値するスポーツマンだ。

プロ選手は例え足の靭帯は伸びた程度ではテーピングをして試合に出たり、骨折して痛みを堪えながら試合をする人だって普通にいる。

俺は一通りの型を確認し終えてから帰路についた。

翌日、俺は初めての川神学園登校して、自分のクラスである1-Cに向かっていた。

Cクラスに入るまで周囲からの視線を感じた。俺の姿を見て友達とヒソヒソ声で会話したり、道を塞ぐように向かい側から歩いてきた男子三人組は俺の姿を認識すると三人は散り散りになって道を譲った。

俺を不良か何かと勘違いをしているのか？

その答えは学園の掲示板で明らかになった。

Cクラスに着いても、俺の半径2m以内にまったく入って来ようとならないクラスメイト。完全に孤立した。

俺は暇だったのでケータイで気紛れに川神学園の掲示板を検索。

『川神学園』『掲示板』で検索結果の一番上に『川神学園専用掲示

板』が表示された。

そのサイトを開いてスレッド一覧を確認すると、一つ気になるスレッドを発見。

タイトルは『川神百代と互角に渡り合った不良S part2』。
俺は迷わずその掲示板へジャンプ。

そこにはある事ない事が書かれていた。

『川神百代が不良Sが戦ったって本当かよ！ しかも互角だったらしいじゃないか?!』

『百代さんの奥義を喰らっても意識は保たもっていたらしい』

『しかも奥義を発動しなければ負けてたってよ』

『うわ化け物ジャン!』
『気性きせうも荒いから怒らせると日常生活に障害が残る怪我を負わせられる』

『そのSは麻薬の密売組織のリーダーだって』

『しかも警察はそのSの証拠を発見できなくてタイーホできない』

『Sは川神学園の1-C所属らしい』

『私Cクラスだけど、そのSは怪我で休みだって』

『学校も疑わしいだけじゃあ退学にできないとよ』

ここまでが昨日までの書き込み。

なんだこれ。ほとんどが嘘で溢あふれてやがる。百代さんの完全試合だったのに、まるで俺が百代さん並の化け物じゃないか。

それでこっからが今日の書き込み。

『Sが登校してきた！ でも意外と外見は普通じゃね？』

『バカ！ それは仮の姿に決まってるだろ！ 川神百代が学園いるから派手に行動できないんだ！』

『俺今Cクラスから実況するわwww 今Sはケータイでどっかのサイトにアクセス中www』

『止めるスネーク！ 危険すぎる！』 『スネーク、バレたら殺されるぞ？』

『皆ビビりすぎwww 俺余裕だからケータイ覗きに行くわwww www www』

『今なら間に合うからやめろ！！』

『ちよwww お前らビビるなよwww こつちまで不安になるwww 今Sの後ろwww バカだから俺に気付いてないwww www』

『この掲示板覗きこんでますけど？ byS』

俺は背後を振り返ると、ケータイ片手のシルバーアクセを財布にジャラジャラつけた茶髪ツンツン頭の、所謂いわゆるチャラ男が不自然に机から身を乗り出していた。チャラ男はカチカチと歯を震わせる。

「言っとくけど、この掲示板は嘘」

「ひゃあああ！！ こ、ここここ、こ、こ、kろしやにやいしえええええ！！！！」

チャラ男は突然奇声を上げて一回転びそうになりながら教室を飛び出した。いや逃げ出した。

掲示板がヒートアップ。

『本人キターーーーーー!!!!!!』

『あのスネーク、逝ったな』

『Cから凄い形相で逃げてたwwww ワロスwwww』

『怖え……。Sが一言何か言ったらスネークが突然逃げ出した……』

『やっぱり噂は本当だったのか』

『僕同じ学年じゃなくて良かったよ』

『レス数が1000を超えています。残念ながらこれ以上は書き込めません。』

クラス全体に緊張が走る。俺が弁解しようと視線を一人の男子生徒に合わせたが、

「チヨット俺の話を聞け！」

「ひいー!!」

男はとても怯えた様子で直立不動になった。

「お前等は勘違いしている！ 良く聞け！ 俺は麻薬組織の、」

ジヨボ、ジヨボジヨボジヨボ。

男は恐怖のあまり足下が崩れて地面に座り込む。黄色い液体が男子生徒のスポンを浸食し、やがて男子生徒の周りに黄色い液体の水溜みずたまりりができた。男子生徒は白目を剥いて気絶した。それを見た女子生徒数名が涙を浮かばせて肩を震わせていた。

漏らした男子生徒は俺にも責任があったので、尿が服に付かないように肩に担いで保健室へ運んだ。

こうして、俺の噂が学園中に広がった。

『恐怖の大王西園寺伸二は一言で人の精神を崩壊させることが出来る。』

登校初日で気に入らないクラス男子二人の精神を破壊した。

そのうちの一人を保健室に連れて行って、男子生徒の純潔を奪った』

いつの間にか俺がホモ扱いになってワロタ……。

第一回 LOVEかわかみ

「ハアイエブリバデイ、春と言えば保育園や幼稚園、そして小学校に小さな少女が入学するとても素晴らしい季節だね。今週もLOVEかわかみがはじまるよー。パーソナリティは2・Sでスキンヘッドがトレードマークの井上準」

「人生、百花繚乱酒池肉林。3・Fの川神百代だ」

「まずは新入生の皆さん入学おめでとうございます。このラジオは百代さんに悩み相談する質問バラエティ。詳しくは学園掲示板を見てね。さて百代さん、今日もメールが沢山来てますよ」

「そうか」

「そうかってあっけないですね。主に貴方と戦った不良Sについての質問ですよ？」

「ああ。伸二の事が」

「ちょっと、気を使ってイニシャルで呼んだのに本名言いますか！？」

「どーでもいいだろ。さっさとメールを読め」

「人使いが荒い先輩ですね。さて、本日最初のメールです。『百代さん、S君が奥義を喰らっても意識を保っていたのは本当ですか？』」

『本当だが、そのあと手刀で眠らせた』

『すごい怪物が一年に現れましたね。じゃあ次の質問。『噂のSは川神学園でどれぐらいの強さですか？』これ俺も気になります。百代さんの奥義を喰らっても生きて登校しているって事は相当強いでしょう？』

『そうだな。川神学園の生徒の中でなら、男子は圧勝するが、一部女子には勝てないだろ』

『そうですか。最近の女性は強いですからね。特に百代さんが。次行きましよう』S君が怖くて一年全体の空気が重いです。どうにかなりませんか？』『そういえば今日の一年は、お通夜状態でしたね』

『その事なら大丈夫だ。あいつは無闇やたらと暴れないからな。もし暴れたら私が肅清しよう。ま、暴れたりはしないだろうが』

『心強い言葉ありがとうございます！ 次の質問、『僕の彼女が照れていて画面から出てきません。彼女が出てくる何か良い方法ありませんか？』……答えますか？』

『そもそも私の存在自体が画面のなk』

『はい、メタ発言はやめましょう。ちなみに画面の中から女性は出てきません。現実を見て、三次元じゆうげんで女性に恋しなさい』

『なあハゲ。今日の質問詰まらないぞ』

『仕方ないですよ。百代さんと渡り合った一年の話題で持ち切りなんですから』

『もつとこう、血が沸く話が無いか？』

『そんなものあるわけ、……新着で面白いメールが来ました。』純
さん百代さん初めまして。何やら1-S女子の武蔵むさし小杉こすぎと西園寺伸
二が決闘するようです。どちらが勝つと思いますか？』百代さん、
勿論勝つのは』

『武蔵だな』

『そう武蔵が勝つよねって、ええ！！ 嘘ですよね！？』

『スポーツやトランプならどちらが勝つか分からんが、試合なら確
実に武蔵だ』

『あ、もしかして西園寺は川神流奥義を喰らった反動で本来の力を
発揮できないとか？』

『いや、そもそも伸二は武蔵を相手に勝負しないだろう』

『おっと。早速決闘の結果が届きました。どうやら西園寺は決
闘を受けなかったようです。百代さんの予測通りです。去り際に武
蔵から玉無しと言われ、西園寺は振り向いて視線だけで黙らせたよ
うです。本当に怖い一年が入学しましたね』

『私にとっては可愛いけどな』

『百代さんと俺達一般市民を一緒にしないでください！ 百代さん
から見れば俺たち学生全員可愛いでしょうが！！』

『おいハゲ。もう時間じゃないか？』

『おっとそうですね。それでは来週、この時間にお会いしましょう。パーソナリティは井上準と』

『川神百代がお送りした』

『それでは良い午後の授業を！！』

第六話 風を翔る少年との出会い

なんつーか友達が出来ない。

クラスメイトどころか担任の新任女性教師も俺の噂に惑まどわされて、
Cクラスは黙々と授業が進む。まるで特進クラスのようにチョーク
と鉛筆の無機質な音と、担当の先生の震える声が教室に響く。随分ずいぶん
寂しい授業だ

昼休みになって俺が教室に残ると、他の人は教室から出て行き、逆
に俺が出て行くとクラスメイトが教室に戻る。

仕方が無いので、俺は屋上で一人寂しく弁当を食おうとした。

二階へ続く階段の途中、不意に後方から俺を呼ぶ声が聞こえた。

振り向いたが誰もいない。聞き間違いか、ともう一步階段を上がる
と女性の声が聞こえた。

「西園寺伸二！」

うん、間違いない。俺を呼んでいる。もう一度振り返ると体操着姿
の女子が立っていた。

そういえば川神学園は体操着がブルマだったな。……もしも俺がブル
マを履きながら体育の授業を受けたらどうなる？ クラスは爆笑
の渦に包まれて、俺は晴れてクラスメイトにお茶目なキャラとして
見てくれるんじゃないか？

よし、ブルマを買おう!!

俺は購買部に自分に合うブルマを探しに行こうとするが、

「ちょっと待ちなさい！ プレミアムな私を無視しないでくれる？」

いや待てよ。昼休みに堂々とブルマを買ったら変態扱いされないか？
ここは放課後の誰もいない時間に買うのが一番ベストだろう。

「だから無視するな!!」

なんか変な女子が殴って来たけど、遅い。百代さんと比べると月とスポン以上の差。速さも力も、特にセンスが感じられない。

「中々やるわね。私のプレミアムなパンチを避けるなんて。」

「……で、何？ 俺を社会の底辺みたいな目で見ちゃって。怨み^{うらみ}でもあるの？」

「あら、気づいていたの？ そうよ。私は貴方みたいな社会のクズがこの学園にいる事に我慢ならないの」

面倒くせえな。俺はこれからその誤解を解こうと考えているのに、そんな学園に相応しくないみたいない方は無いだろ。

「我慢ならないなら俺をどうしたいの？」

「貴方に決闘を申し込むわ!!」

いつの間にか周りを見かねていたギャラリーが騒ぎ出す。ブルマ姿の

女子が川神学園の象徴である竜が描かれているワッペンを叩きつける。

「私の名前は武蔵小杉。貴方を倒すプレミアムな者の名前よ！ 負けたらここを出て行ってくれ。」

「別に良いけど。ちなみに決闘の内容は？」

決闘と言っても内容は様々。実際にバーリトウッドウでの勝負は勿論のこと、勝負であれば何でも良い。料理、スポーツ、チェス、賭け、歌唱力でも何でもだ。学園側が認めれば極論、殺し合いでもOK。まあ学園側から容認されればの話だが。

「素手で勝負よ。どちらかが負けを認めるまで勝負を、「断る」

何言ってるんだ、この女。武蔵つつたか。百代さんほどの強さがある訳でもないのに、俺と勝負？ だからと言ってどんなに強かろうと弱かろうと女子と戦う気は無い。前にも言ったが、これは母からの遺言の一つだ。

「断るって、まさかビビってるの？ 私に負けて学園を去りたくないから断るの？ 傑作だわ！！」

まあ何とでも言え。俺はそんな勝負よりも、どうすればCクラスの皆と仲良くなれるか考えているんだからさ。

「これからは『玉無しの伸二』とでも名乗りなさいよ。『玉無し』」

これは寛容さがオカン級の俺でも怒ってしまう言葉だ。女子と勝負しないだけで玉無し？ 元から玉ねえお前に言われる筋合いはねえ

よ!!

「お前、うつせえよ」

武蔵に聞こえるように、そう囁いた。俺の顔を見た武蔵は低レベルな挑発を止め、押し黙ってしまった。気丈な態度を続けて取るが、顔には恐怖の表情が浮かび上がる。

不良にも良く使った手だ。大抵人っていうのは、本来の実力とは関係無しに見た目で相手の実力を測ろうとする。だから怒りの表情で相手を怖がらせれば、こいつは強いだの自分より格上など勝手に妄想してくれる。なので俺は日頃威嚇用に、相手を怖がらせる顔を練習し取得した。

俺は誰もいない屋上を目指した。

屋上には先客がいた。

赤いバンダナを頭に巻いた男性が寝ていた。しかも涎の痕が頬にあった。一体どれぐらい寝ていたんだ？

しかし、ここ以外で昼飯を食べる場所は無いので、俺は屋上に設置してあるベンチでコンビニ弁当を食い始めた。

弁当を開けたと同時に寝ていたバンダナ男が目覚めた。んで、俺の弁当を食い入るようにつめ始めた。

「美味そうな弁当だなあ」

と言ったと同時に腹の鳴る音が辺りに響き渡った。どうやら腹が減っているらしい。

屋上で堂々と寝ていることから、この男は多分学年が上のはずだ。しかも俺の姿を見て逃げ出さないし。これはこの男と友情を深められるチャンスだ！

「良かったら食うか？」

「良いのか!？」

「ああ。腹減ってんだろ？今日は弁当を二つ勝ったから一つ食って良いぞ」

コンビニ弁当一つだけだと俺は腹が減るので、常に二つ以上の弁当を買う。

「それじゃ、遠慮なく貰うぜ！」

もう一つの弁当をバンダナに渡して、雑談をしながら食べる。

「そついやお前、伸二だよな？」

「そつだけど、何か？」

「やっぱりな。モモ先輩が担がれてたのをチラッと見てな」

モモ先輩、まあ普通に考えて百代さんだよな。この男、百代さんの知り合いか？

「あの時はすまなかつたな。敵さんにまんまと嵌められて、お前を傷つけちゃって」

「そうか。お前もあの麻薬事件を一掃したメンバーの一人か」

「ああ。自己紹介がまだだつたな。俺の名前は風間翔一。かざま しょういち一応、風間ファミリーのリーダーをしている」

「また安直な名前だな」

「ま、小学生が決めた名前なんてこんなもんだろ。確かワン子とモモ先輩とは会つたんだよな」

ワン子……ああ、一子先輩の事か。一だからワンね。ある意味衝撃的な出会いだつたな。まるでエロゲの展開だつたし。

「他のメンバーに会つたか？」

「いや。風間さんと一子先輩と百代さんだけだ」

「そうか。なら今度の金曜日に、この前のお詫びを兼ねて来て欲しい場所がある」

「別に構わない。けど、お詫びなんて悪い。あの件は俺にも責任があるし、今は川神院に下宿させて貰っているから逆にこっちが悪い気分になる」

それを聞いた風間は、ニツと笑った。まるでイタズラ小僧が何か面白い事を思い浮かべたように。

「お前、気に入った！ 絶対に金曜日にあそこに連れて行ってやる
！！ 楽しみにしているよ！！！！」

風間は残っていた弁当を口の中に捻じ込んで立ち上がる。

「それじゃ、ごっそさん！！」

そして風間さんは文字通り風のように駆け出して屋上から去った。
まるで子供をそのまま大きくしたような奴だが、不思議な魅力がある。
言葉では表せない、なにかこう、俺の心の隙間に入り込んで、
風間さんが気に入ってしまった。たった一度の雑談で、俺は風間さん
を好きになってしまった。

午後の授業が始まる鐘と共に、俺も屋上から姿を消した。

第六話 風を翔る少年との出会い（後書き）

こんばつぱー。餡子餅を食べると無条件に吐き出す御手洗団子どえーっす。

今回は風間登場です。

相変わらず展開が遅いです。ヒロインとの絡みがここまで無いまじこい二次創作はあったらどうか？

まあいいや。自分のペースで進めて行きますので、どうか今後ともよろしゅうお願いしますね。

第七話 友達できない同士(前書き)

第四話に割り込み投稿をしましたので、見ていない人は見てくださ
い。

第七話 友達できない同士

ブルマは止めだ。思いつきで買おうと思ったが、なんと購買部の店員が若い女性だった。

おばちゃん相手にだったら買えるけど、流石に同年代程の、しかも結構好みの女性の前ではブルマを買う事しかできない。

川神院に帰る途中、百代さんとバッタリ会った。

「よう伸二」

「どうも」

「丁度よかった。伸二にちょっと聞きたい事が…… やっぱり何でもない。気を付けて帰れよ」

百代さんは俺を見た瞬間、何か言いかけたが結局何も言わずに去って行った。なんだったのだろうか。

しかし友達がいらないのは辛いな。中学は母さんと鍛錬の毎日で、結局不良の知り合いしかいなかった。やっぱり人付き合いが大切なんだな。改めて実感した。

取り敢えずブルマで笑いを取る案は保留。違う作戦を考えなければならぬ。何が良いか。

腕を組んで考える。例えば川神学園の生徒が不良に絡まれて、俺が助けて俺の評価が上がる、なんて漫画展開にならんもんかね。クラ

スメイトは授業以外俺の半径3mには絶対入らんし、教室を出れば廊下がガランとなるし。話す切っ掛けが少ない。

……そういえば一人だけ俺が隣の席であるのにも拘らず、逃げ出さなかつた女生徒が一人いたな。

綺麗な黒緑の長い髪を左右に一つずつ縛った髪、安産型で形の良い尻、同じ一年生とは思えない発育の良い身体。そして極めつけは刀を持つている事だ。本物らしい。名前は確か、まゆずゆきえ 黛由紀江だ。

何故あの娘は俺を避けなかつたのか分からない。授業間の10分の休み時間も、一人で授業の準備をして椅子に座って待機。他の連中は素早く教室から逃げ出すと言うのに。

もしかして黛も、俺と同じで友達がいらないのか？

これはラッキーかもしれん。同じ友達がいらない相手なら話題も作れるし、何よりも俺を避けない。これ程良い話し相手はいない。

早速明日話しかけてみるとしよう。相手は女子だが文句は言うまい。出来れば男子の友達が欲しかったけど。

と、早速明日話しかけようと思った矢先に、俺の直進20m先に刀を持ったクラスメイトが一人で下校していた。これは、チャンス！

「へい、黛！ ちょっと話しようぜっ」

スマン。俺は変なテンションになって、黛にナンパみたいに喋りかけちゃった。

「わ、わわわわ私ですか!!」

案の定、黛はビックリしているようだ。

「うん、まあ君しかいないんだけど」

俺の言葉に釣られて左右見渡して、自分しかいないのを確認すると、突然黒い馬を模したストラップを取り出した。

「やったなまゆっち！ こいつはクラスメイトの伸二じゃねえか！

向こうから話しかけてくるチャンスなんて滅多にないぞ!!」

「はい、松風！ このチャンスを生かします!!」

腹話術で、ストラップと会話、だと？

この娘、どんだけ寂しい奴なんだ。なんか、塩水が目から溢れてきやがる。

「さ、西園寺さん！ お話とはなんですか！」

メツチャ俺を睨んでる。口の端を目一杯上げて笑顔を無理に作るうとするが、逆に怒っているように見える。

「いや、黛って、友達いないよね？」

なんか黛の顔の所為で、俺にも変な緊張が走る。

「良かったら同じクラスだし、メル友になってくれないかなあ、て」

俺の友達という言葉に敏感に反応する黛。またもやストラップを取り出した。

「ど、どうしましょう、松風！ わ、私、こんな時、何て言えば分からなくて！！」

「落ち着けまゆっち！ これは大大チャンスだ！！ これを逃したら一生友達が出来ないぜ！！」

「はい！ 粉骨碎身頑張った友達作りの努力を無にしない為に、ここで成果を出します！！」

「その意気だけ、まゆっち！！」

どうやら一人会議が終わったようで、素早くストラップを元の位置に戻した。

「わ、わわわ、私で良かったら、喜んで！！」

ストラップと喋っている素の方が可愛いのに、対人になると酷い顔になるな。しかもストラップとの会話の声が大きくて、話している内容が筒抜けだ。

「それじゃあ、俺のメアド赤外線で送るから」

「は、はい！ ちょっと待っててください！！」

ケータイを取り出して赤外線通信の準備を始めるが、黛の方は何だかもたついている。

「あ、あれ？ 赤外線つてこつち、ああ違う！！ じゃ、じゃあこつちかな？ こ、こつちでもない！！」

どうやらケータイの扱い方が分からないようだ。10分ほどしても一向に見つからないので、黛のケータイを借りた。

「ちょっと貸して」

「あ、は、はい」

一体どこにあるのかと探し始めて数秒、メニューボタンからツールの中に赤外線通信があった。その後俺のアドレスを黛のケータイへ送った。

「はい、これでオツケー。俺のケータイに空メール送って」

「わ、わかりました」

今度は少し戸惑ったようだが、無事俺の元へ黛の空メールが送られた。するとまた黛はストラップを取り出した。

「やりましたよ、松風！ 初めて家族以外のメアドを手に入れました！！」

「やったぜ、まゆつち！ これも人形相手に練習したお蔭だな！！」

「はい！ 毎日100回練習した一つの成果ですね！！」

「でも、これで満足しちゃいけない。今はメル友ゲットできたから、次は普通に遊ぶ友達をゲットだ！」

「はい！　これから西園寺さんとの距離を縮められるよう頑張ります！！」

なんだか一人で盛り上がっているが大丈夫か？　ちょっと話に混ぜてみよう。

「黛、一体このストラップはなんだ？」

「はっつ！？」

驚いて数歩俺から離れる黛。まさかストラップと喋っているのがバシでないとも思っていたのか？

「う、うううこれはその、あの、失礼します！！」

恥ずかしさのあまり突然走り出して逃げた。しかし、あの黛って子身のこなしが良いな。あれだけのスピードを維持して約100mは走りきったぞ。陸上選手のスプリント並だ。

この川神には俺の知っている可愛くてお淑やかで、か弱い女性は一人もいないのか？

改めて川神市の女性は凄いと感じた一日だ。

第七話 友達できない同士(後書き)

面接がやっと今日終わりましたよ。一つがね。

あともう一つ、十一月の頭にあるので、これからまたまーに更新されない日が出て来ます

本当好きに毎日更新したい!!

第八話 はじめての金曜集会 其の一

戦いたい。

いつからだろう。私の欲望を抑えられなくなったのは。

戦いたい戦いたい。

心の底から、いや心に絡からまった戦闘意欲が次第に心までも侵略を始める。心が染まる。

戦いたい戦いたい戦いたい戦いたい。

私と渡り合える、丈夫で強くて私を理解する強者に会って、この内に秘めた欲望を曝ひらけ出しながら、

戦いたい。

勝負戦争決闘決戦決勝闘争試合死合死闘。兎に角、拳をぶつけて、脚で蹴って、頭突いて、最後には殺し合いで死にたい。

それが私の夢。

それが私の正体。

それが私の欲望。

それが私の本望。

それが私の本質

それが私の本性。

世間なんてどうでも良い。仲間なんてどうでも良い。家族なんてどうでも良い。ただ私は、戦いたいんだ。

たとえ私が人間になれなくとも。

獣になっても。

そして、人間に戻れなくても、私は戦いたい。

今日で五日だ。

戦わなくなつてたつた五日だ。

確かに私が犯した罪の罰だ。だが、それで一カ月も戦つのを禁じるのは、私には厳しすぎる。

身体が疼く。

私が収めている衝動が日が経つに連れて、疼いて蠢いて暴れて最後には、私の殻を突き破る。

誰でも良い。

この衝動を抑えてくれるなら、誰だって良い。

私を、助けてくれ……。

四月十日金曜朝。俺は気持ちの良い朝を迎えていた。

天気は晴れ、今日一日降水確率0%。絶好の登校日和だ！

ま、勿論未だ学校行っても話せる相手は3人しかいないけど。

百代さんと風間さんとまゆつちだ。意外と前者の二人と喋ってるお蔭で、他の生徒が俺への警戒心を解いて来てくれた。

風間さんから「俺が事の真相を話そうか？」と提案してくれたが、きっぱり断った。出来れば自分の力で誤解を解きたい。俺が付き合っていた人間関係が発端な訳であって、風間さん達はそれに巻き込まれたんだ。

確かに風間さん達にも非がある。だけど俺と風間さんはもう友達になつて、それまでの経緯をチャラにしたんだ。だったら以前の自分の身から出た錆さびは自分で後始末をする。最初から貸し借りのある関係にしたいくないんだ。

最初は飽くまでも対等な関係で、相手の事を理解することを第一にする。その後、互いに困ったことが在ったら互いに利益に関係なく助け合う。これが俺の友人関係の理想だ。

だから今は助け合う時ではない。これくらいの事は自分でどうにかするさ。

しかし、この頃の百代さんは何か大人しい。出会った頃と違い、何か自分の内に溜めこんで、それを吐きだせず*に*我慢しているようだ。

本人に遠回りに訊いてみたが、全然答えらしい答えが聞けなかった。

どうやら風間さんも知らないようで、毎日百代さんはバイトに明け暮れている。

仲間内にも話せないものを百代さんは背負っている。背負わざる終えない状況に置かされている。

百代さんの性格から察するに、相談したくても相談できないんだ。

ならそつとしよう。

ここで助け船を出しても、百代さんには苦痛にしかならないと思う。俺の当てにならない直感がそう伝えてくれる。

ここは見守るしかない。百代さんが限界に、手遅れになる前に助けるまで。

「へいへいへーい！ まゆっち一緒に昼飯食おうぜー！」

「は、はい、シンくん」

隣の席にいるまゆっちの席を俺の席と合体。互いに弁当を広げる。

黛からまゆっちへの渾名へ、伸二がシンくんに移行したのはつい先日、互いに渾名で呼び合った方が友達らしくていいとまゆっちな案。しかし表情は硬いままだ。たまに俺との会話で素の笑顔を見ることがある程度

昨日からクラスは段々と明るくなってきた。俺が無害であると気が付き始めたんだ。

茶髪の方は何とか俺が自宅まで謝りに行って登校してきたが、髪を黒髪に戻してピアスも取って普通の姿になった。

もう片方は手遅れで、学園で漏らしたことがショックで遠くの学校に転校してしまった。申し訳ない気持ちで一杯だ。

『ハイエブリバディ、今日は残念な知らせだ。今日のLOVEがわかみは休止です。川神百代さんの体調不良が原因です。体調不良というのは建前で、実は今日の百代さんは機嫌が悪いんだ。皆も百代さんに会ったら下手な行動をしないように。俺なんかただ少女についての魅力を語っただけで怪我しちゃったよ』

それは井上が悪いだろう。井上の少女趣味はもはや犯罪の域だからな。逆に抑制だけですんで良かった。下手すれば警察のお世話になる。

「お、そのハンバーグ美味そうじゃん。まゆっちが自分で作ったの？」

「はい。全部お手製ですよ」

「お手製良いよね。コンビニの弁当では味わえない家庭の味が俺は好きなんだけど」

生憎あいにく俺のキッチンキッチンは改善作業で忙しくて使用どころか進入禁止。普段は経費削減の為にコンビニ弁当は滅多に食べない。

「一欠けら食って良い？」

「はい。取って良いですよ」

そう言っまゆちちは弁当を俺に差し出す。弁当箱の中の小さく切り分けられたハンバーグを一つ取って口へ運ぶ。

「う」

「あ、お、お口に会いませんでしたでしょうか！ 申し訳ごいません！！」

「うめえじゃん！！ これお母さんが作ったの？」

「え？ ええ！ 美味しいですよ、か」

「ああ。メツチャ美味い。冷めているのに肉汁が口の中に溢れてくる。何を入れているの？」

「じ、実は鳥ひき肉を入れました。鶏肉の肉汁は人間の体温で解けるので、冷めても肉汁が溢れる仕組みとなっています」

成る程。鶏肉か。今度弁当を作る時に試してみよう。

「やったぜまゆっち！ 伸二の好感度がアップだ！！」

「はい、松風！ 普段から弁当を作ってた甲斐がありました！！」

なんだかまゆっちと松風の腹話術も慣れたな。最初どんな自作自演だよと突っ込んでいたけど、松風はまゆっちが出せる本心でありもう一人のまゆっちなんだ。内気な性格が造り出した理想の自分の姿の一つだと俺は考える。

「よ、よよ良かったら他にも食べませんか？！」

テンパった様子でまゆっちが俺に他のおかずも進める。

「大丈夫だよ。これ以上俺が食うとまゆっちの分が無くなるだろ？」

「で、でわ、こ、ここここお、これから私が、べ、べんちようを作つてきましょーカ！」

所々噛んでいたが、話の内容は理解した。これからまゆっちが弁当を作つてきて来るかどうかという事か。

「いや、遠慮するよ。そう言つのは彼氏が出来たら、彼氏にしてあげろよ」

「彼氏？！ そんなもの私にいません！」

「うん。わかるよ？ いたらまず俺と昼一緒に食べないでしょ？」

なんだか余計テンパってしまったな。まゆっち的に友達の親睦を深めるために弁当を作ってくれと言ってくれたのかな？

その後、まゆっちとの他愛も無い話に花を咲かせ、本日のメインイベントが待ち受ける放課後へと時が進んだ。

第八話 はじめての金曜集会 其の一（後書き）

ども、おてあらいだんごではございません。みたらしだんごです。次回、其の二で風間ファミリーが総出演を果たします。では、また次回会いましょう

第九話 はじめての金曜集会 其の二

風間さんに言われて町外れのとある廃ビルへやって来た。

ここで、金曜集会なるモノを風間ファミリーでやっているらしい。

本日風間さんはバイトらしく、俺一人で来た。一子先輩や百代さんもそのメンバーだが、百代さんは不特定多数の美少女を侍^{はべ}らせながら欲求解消だと言い残して消え、一子先輩は鍛錬を一通りし終わった後に来るらしい。

バイトが終わった風間と共にここに来る予定だが、少しこの集まりに興味を持ったので、下見に来た。

流石に集まる部屋までには行かない。今回は道筋の大体のルートを確認に来た。

結構大きなビルだな。学生の集まりだから、てっきり小さな小屋だと思っていた。

ビルから一人、誰か出て来る。白い学生服に紺のズボンから男性であると分かった。

中肉中背で平凡的な体格だ。顔も普通の中の普通。俺が今考えたベスト・ザ・普通・イヤーに輝くだろう。

「うわあ！ 西園寺伸二!？」

目が合うと同時に驚きの声を上げる男性。酷く怯えた様子で、俺と

の距離を取る。

「ま、まさかこの間の腹癒せに、ここまで来たの？」

「んな訳無いだろ。俺がそんな酷い人間に見えるか？」

男性は俺の頭の先から足の先までじっくり見たあと、深く頷いた。
ちよつと傷付くぞ。

「だ、だって君って、少なからず麻薬取引をするような人たちと親交があつたんでしょ？」

「俺がヤク使っているように見えるか？」

「見えないけど、掲示板を見る限り君は麻薬中毒者みたいに書かれているよ。普通そうに見えて、学園の屋上でやってるって」

「くくく、そうそう。この白い粉をスプーンの上に少量乗せて、下からライターで炙るんだ。」

んで、トロトロつとしてきたら、注射器でポンプして中に入れるんだ。

それから腕の脈が浮き出るように、腕を紐で縛るんだ。

俺ぐらいの常習者は打ち過ぎて肌が硬くなるからな。柔らかいとこを探して、静脈に刺す。

初心者はここで打ちまうようだが、まだ早い。

一旦血液を吸い込んで、注射器の中で溶けた白い粉と混ぜるんだ……。

最後に……体内に……押し込む……。

ああ……ああああ！……くぁ……あああつふ……。

お、おれはぁ……さ、……最強の、せんしだ……。

ああああああああああああああああああああああああああああああああ！

俺なりにジヨークを言ってみたんだが、どうやらこの男性はお気に召さなかったようだ。

「や、やっぱり常習者だ」

「ジヨークだよ！ ジヨークー！！」

「なんか描写がリアルだったけど？」

「なら俺の腕を見る！ 注射針の痕なんかねえぞ！」

俺は制服を脱いで腕全体を見せつける。それを見てもまだ疑った視線を浴びせ続ける。

「モロが制服を肌蹴出した見知らぬ男性に言い寄られている。ゴク
リ」

「ちよっと京！ 何そのBL的妄想！」

突然俺の背後に現れたこちらも見知らぬ少女。

結構小柄の体系に似合わずスタイルが良い。短い髪で顔全体がハッキリ見えて、一見清純そうに見える。

「さあ、私に構わず続けて」

「そうか。ならモロ、覚悟は良いか？」

俺は更にベルトを緩めて、男性の顔に手を添える。

「なんで乗り気なの！？ 僕、そんなアブノーマルな趣味無いよ！」

俺の手を叩き落として、凄まじい速さで距離を取る。

「俺だってねーよ糞野郎！！ ただこの場の雰囲気に乗っただけだ
っつーの！！！！！！」

「なら止めようよ！！ 誰も幸せにならないよ、この展開は！！」

「私は幸せになれる」

「だってさ。諦める」

「なんで君は諦めてるの？！ ノリでやるレベルじゃないよ！！」

うん。まあこの辺で勘弁してやるか。流石に悪ノリしすぎた。

「冗談は置いて、お前ら、風間ファミリーの一員か？」

下で自己紹介を済ませ、俺は秘密基地の部屋まで案内された。

内装は意外と綺麗でこの部屋だけ改装されたようになっていた。机を中心に三つのソファが並び、二つほど棚がある。棚の中には小説、ライトノベル、漫画、ゲームの攻略本など多々ある。電気は通って無いらしいが、秘密基地としては豪華すぎる。

「ごめんね。まさかキャップの紹介で来たなんて知らなかったよ」
先程の男性は師岡卓也もろおか たくやと言うらしい。俺の一つ上の先輩で、所謂オタクだ。ここにある漫画は大抵この男が仕入れてきたんだと。漫画をざっと見たが、俺と趣味が合いそうだ。

「なんだ。キャップの紹介か。てっきりモロに一目惚れしたのかと思った」

このBL趣味丸出しの少女は椎名京しいなみや。同じく二年生。こちらはBL趣味以外だと、大人しい普通の少女だ。顔も可愛い。実は俺のタイプだったりする。

「はい。みんな、飲み物が出来たよ。伸二はコーヒーミルク入りで良かったよね？」

「あ、ああ。ありがとうクッキー、さん？」

俺にコーヒーを淹れてくれたこの人物、というかこの物体の名前はクッキー。卵に手脚が生えたような形をしている。胸元には電子レンジの扉程の小さなドアがある。

「呼び捨てで良いよ。僕、さん付けは慣れてないからさ」

なんとまあ高性能なロボットで。どこで造られたか聞いてみたら、かの有名な九鬼財閥だと。あの財閥は本当に色んなモノに手を出しているんだな。流石世界の九鬼財閥と謳っているだけある。

俺が一口コーヒーを飲むのと同時に、一人の男性が入室した。

「あれ？ 今日は見慣れない奴がいるな」

こちらモロさんに似て中肉中背だが、若干身長はモロさんより勝っている。顔もイケメンだ。風間ほどではないけど。

第一印象としては、ヤドカリが好きそうな顔をしているな。いやマジで。

「どうも。風間さんから言われてここに来たんだ。名前は西園寺伸
二」

「西園寺って、ああ。この間のか。あの時はすまなかったな。しかし姉さんにヤラれたにしては、元気だな」

「ん、まあ川神院の人に介抱されて貰ったし、そんなに深いダメージを喰らってなかったんだ」

「そうか。なら良かった。俺の名前は直江大和。モロや京と同じ二年だ。よろしく」

そう言っただけで俺に右手を差し伸べる。俺も右手を出して、握手を交わ

した。

その後、大和さんとモロさんの連絡先を交換して、軽く親睦を深めるために二人と談笑を始めた。

椎名さんは読書をしながら、大和さんの隣で大人しく座っていた。

第九話 はじめての金曜集会 其の二（後書き）

ふう。御手洗団子です。

すいません。前回言った風間ファミリー全キャラ登場できませんでした。

つーか忘れてました。ガクトの存在をw

次回こそ、風間ファミリー全キャラ登場させます！！ 以上！！

第十話 はじめての金曜集会 其の三

「椎名さんは大和さんの未来のお嫁さん？」

大和さんとモロさんと話が弾むはすに連れて、たまに椎名さんが口を出すようになった。

女性の話になってから、というか大和さんに彼女がいるかどうかの話題になった瞬間、椎名さんの口からトンデモナイ言葉が出て来た。

「そう。私は身も心も大和に捧げたの」

「断じて違う。事実無根の京の妄想だ。絶対に違うからな」

顔を赤らめている椎名さんに斜め45度からのチョップを叩く大和さん。まるで壊れたテレビを直す作業だ。

まあ客観的に見て、椎名さんは大和さんにぞっこんフォーリンラブと言ったところか。

そんな光景を笑いながら見ているモロさんは、なんだか大和さんを羨ましがっているようだ。彼女が欲しいのかな？

「羨ましいなあ。そんな可愛い子に言い寄られたら、俺だったら即付き合いますね」

「俺はそんな軽率な男じゃない。俺にだって好きな人くらいいる！」

おっと、ここでまさかの第三者の出現。これは昼ドラ並のドロドロ

した三角関係が出来るのか。

「へえ。大和にも好きな人がいるんだ。それって誰？ 僕達の知っている人？」

「うん。私も聞きたい。大和、一体誰と不倫したの？」

意外にも大和さんに最初に特攻したのはモロさんだ。それに続いて椎名さんも援護しにきた。

「べ、別に誰だって良いだろ！ 個人の自由だ！」

「西園寺くんだって聞きたいよね？」

おっと、ここでまさかの椎名さんからの救援要請。どうする？ ここで重要な選択肢としては、？大和さんの援護に入る。？大和さんを追撃。？面倒だから中立を装うのどれかだな。

「……正直聞きたいです」

椎名さんは右手の親指をサムズアップ。俺も右手の親指をサムズアップ。

「さあ大和。三対一でこちらが有利よ。観念しなさい」

「一体いつから多数決で俺の好きな人を話すかどうかが決まってるんだよ！ 絶対ここでは喋らないからな！」

往生際の悪い奴だな。別にここには女性は一人しかいなくて、しかも他に好きな人がいるなら本人に聞かれる訳では無いのだから、話

しても良からうに。

……いや待てよ。大和さんがノーマルだと誰が言った？ この世にはゲイやオカマや両刀バイが存在するんだ。男性好きの男性の可能性が十分にある。ここには女子が一人だが、男子は二人いて、中々話さない。そこから導き出される一つの答えは

「もしかして大和さんって、モロさんの事が好きなんですか？」

「な！ そんな訳無いだろ！！」

「だってここで喋らない！好きな人に聞かれる可能性がある。だから京さんの事が好きなら、既に付き合っているはず。なら残っているのは俺とモロさん。俺は今日会ったから論外。なら最後に残される可能性は」

「確かに。その可能性、否定できない」

「おい京！ なにマジで受け止めているんだよ！！俺はノーマルだ！！おいモロ！ お前も顔を赤らめるな！俺にはそんな気は毛頭も無い！！」

「大和、僕にはその、そんな趣味無いから」

「だから違うって！俺にもそんな趣味はないよ！しかも何で勝手にモロに振られてるんだよ！」

「そういえば、昔の人は偉いこと言いましたね。愛があれば性別は関係ないって」

「止める西園寺！ どんだけ俺をそっち側に落としたいんだ！！
何度も言うが、俺はノーマルだ！！！！」

「大丈夫ですよ。最近ではテレビでも同性愛者の芸能人が増えてますから」

「全然フォローになってないよな！ 西園寺、一応先輩だぞ？ 分かっているのか？」

「分かってますよ。尻を貸す、以外なら何でも承りますよ」

「やっぱりわかってないだろ！！」

「男なら許す！」

「何が許すだ京！ さっきから言っているように、俺は姉さんが」

しまったと口を塞ぐがもう遅い。誰が好きなのかここに居る全員にバレてしまった。

上手い具合に口を滑らしたな大和さん。まさかカミングアウトをしてくれるなんて思ってもいなかった。

しかし好きな人は百代さんか。ハードル高いぞ。色々な意味で。

「オーツス！ ってなんだ、今日は知らねえ奴がいるじゃねえか」

大和さんの口を滑らしたのと同時に、デカい男が部屋へ入って来た。

身長は190弱でかなり大きい。しかし、残念な事に足が短い。顔の造りも男臭すぎて、これでは全然モテないだろう。

筋肉がガツチリしていて、細マッチョブームに逆行した体系。髪型もダサイ。

デカイ男登場と同時に、大和さんが俺、モロさん、椎名さんにアイコンタクト。さっきの事を忘れる！と言っているのだろう。

モロさんや椎名さんは大和さんにアイコンタクトを返す。何か要求をしているみたいだ。それを大和さんは渋々（しぶしぶ）OKを出した。

「初めまして。俺の名前は西園寺伸二。一年だ。今日は風間さんの紹介でここに来た」

「ほう、そうか。俺様は島津岳人だ。よろしくな！」

俺様……そんな一人称がまだ残っていたのか。どんだけ自分が好きなんだろう、この人。

「どうだ西園寺、この髪型は。すごく決まってるだろ？」

ガクトさんの髪型は、まるで雑誌に載っているモデルのようにヘンテコな髪型をしている。この風格と顔ではミスマッチすぎる。

「はい。（ある意味）決まっています」

「だよなあ！ ほら見る大和！ やっぱり、お前の感覚がズレているんだよ！」

「ガクト、お世辞だつてことに気付いけ。下級生だから遠慮しているんだらう」

「なに！ そうなのか！？」

「いえいえ、ガクトさんの髪型が（ある意味）決まっているから、今日は女子の視線ビンビン感じたでしょう？」

「おうよ一年！ 見る目が違うな。今日はすれ違う女ほとんどが俺を二度見したぜ！ やっぱこのモテモテ本は効果絶大だな！！」

ヤバイ。笑いを堪えられないかも。顔に似合わないオシャレ髪型だったら、誰だつて驚きのあまり振り返るであらう。しかもなんだ、この自費出版で出したような安っぽい雑誌は。絶対に騙されてる。

「しかもこの本にはまだまだ沢山のモテる裏技が載ってるんだぜ。例えば電車で隣に座る女性をナンパする秘訣や、道に迷っている女性のカッコいい道案内があるんだぜ！ 西園寺、これ読み終わったら、お前にも貸してやるよ」

「あ、ありがとうございます」と俺は肩を小刻みに震わせながら返事を返した。ホントにヤバイ。面白すぎる。この人、絶対女性にはモテないだらうな。男なら友達としてアリだけど。

そんな時に救世主。川神姉妹がようやく到着した。

「あれ？ なんで伸二がここにいるの？」

「いやースッキリした。やっぱり美少女と戯れるのが一番の欲求解

消だな」

これで風間ファミリーは風間さん以外全員終結した。事前に聞いたメンバー7人と人数が合う。

「あ、どうもどうも一子先輩に百代さん！ さあこっちに座って談笑でもしましょうー！！」

その後風間さんがバイトが終わるまで各自、他愛の無い会話や、自分の趣味に没頭するのであった。

第十一話 はじめての金曜集会 其の四

日は暮れ夜空に月がくつきりと見える頃、大和さんと談笑中、外からバイクのエンジン音が聞こえてきた。多分、風間ファミリー創設者風間さんのバイクの音だろう。前に一度風間さんがヤマハのバイクに乗っていたのを記憶している。

「いてっ。……ん？ この音は、キャップか」

百代さんに弄られていた大和さんも気付いて、窓の外に目をやった。

「ああ。間違いないな。この楽観的な“気”は」

流石百代さんです。人を漫画で出るような“気”で判別できるのは武神の百代さんだけです。

ついでにキャップというのは仲間内での風間さん専用ニックネームだ。由来は小学校から付け続けているバンドナから来たらしい。

「ウィ〜ッス！ 皆待たせたな！」

ドアを壊れんばかりに開けながら風間さん入室。両手に白い袋を二つほどぶら下げている。

「おお伸二、来ていたか。うんうん。今日来たばかりなのに早くも馴染んでいるな」

そう言って風間さんは窓際のソファー中心部に座る。どつやらそこが風間さんの特等席らしい。

「待つてました！ 今夜の晩ご飯！！」

一子先輩は餌を待ち侘びた犬が、餌を持った飼い主に寄り添うように風間さんに駆け寄った。餌付けすれば色々と出来るかな。

「相変わらずだなワン子。ま、全員揃っているようだし……始めるか」

ドンツとテーブルに荷物を置く。その中には大量の寿司と蕎麦があった。

「今日は大量ね」と大喜びの一子先輩。

風間さんが荷物を置いたと同時に、皆さん各々の作業を中断してテーブルを囲むように集まる。どうやらここで食事を皆で取るらしい。

「それじゃあ頂きますの前に、皆に提案がある」

寿司に手を伸ばしていた一子先輩の手が空を切る。今の一子先輩の心境は食事を前に待てを要求された主人に従順な犬だな。

「皆も薄々気づいているだろうが、この一年の、西園寺伸二を風間ファミリーに入れようと思う！！」

突然だ。まあ皆さんも大体予想していたのか、あまり驚いていなかった。

「この前伸二と話す機会があったんだけどさ、こいつ意外と良い奴なんだよ。俺気に入ったんだ。で、皆にもこいつの良さを知って貰

いたくてここに呼んだんだが、どうだ？」

皆さんそれぞれで軽く思考を巡らす。と、そこに大和さんが横やりを入れた。

「皆に聞く前に、伸二自身に聞いた方がよくないかキャップ」

「それもそうだな。伸二、ここに数時間いてどんな気分だった？」

おっと、皆の視線が俺に集中してちよつと恥ずかしいぞ。まあここは思ったように話すか。

「えっと、俺的にはここにいて、結構楽しかったです。秘密基地としてはかなり多くの娯楽道具があつて飽きないし、何より先輩たちとの雑談も面白いから、出来ればここにいてみたいです」

言った。言ったぞ、俺の本心を。

「だそうだ、皆。俺もこいつと同じで、伸二をここに入れてみたい。ここからは俺たちの意見の発表だ。まずはモモ先輩から」

キャップに促されて百代さんが口を開いた。

「私は賛成だ。伸二を入れることは。……言つて置くがこの決断は私の意志で、決してこの間の罪滅ぼしではない。伸二が風間ファミリーに入つても楽しくやっていけると私が判断しただけだ。以上」

百代さんが言い終わった直前に次々と口を開く。

「俺様は賛成だ。伸二は見所がある後輩だ。俺様の良さを全部理解

してくれている」

「……岳人はからかわれているだけだろ」

「大和、俺や伸二がモテモテになっても妬ねたむんじゃねえぞ」

大和さんの的確なツッコミが岳人さんの耳にはこの日伝わらなかった。

「私は、伸二君が楽しんでくれるなら賛成、かな」

「俺も本人が良ければ言いたいと思うが、」

なんと大和さんと一子先輩が賛成に一票を投じてくれた。この時点で殆どの人が俺を受け入れても良いと。

しかし、ここからが山場だった。

「京はどうだ。伸二が風間ファミリーに入るについて」

「普通に反対」と端的に発言する椎名さん。

「今までもこのメンバーでやってきたし、これ以上は必要ないと思う」

メツチャバツサリ切り捨てられた。本人目の前にいるのに。いや、逆にこれくらいいぶつちやけてくれた方が良い。気を使われて本心を言わないで、陰で悪口言われる方が嫌だ。

「僕も反対かな」と反対が二人となった。

「賛成五人に反対二人。多数決ならこれで決まりだが、少数派の意見も尊重しないと。そこでキャップ。一つ提案がある」と。

ここで川神学園一の軍師と名高い大和さんが語り出した（先程の雑談中に聞いた情報）。

「提案？」

「ああ。このまま風間ファミリイに入れても、伸二の行動や言動一つがファミリイの雰囲気悪くする可能性は少なくとも0ではない。だからここは部活で云う『仮入部』的なポジションとして傍で一緒に遊ぶ。そして、モロや京が納得したら伸二を正式に風間ファミリイに入れ、逆にずっと反対派の意見が変わらなかつたら入れない。これでどうだ」

大和さんの意見はごもつとも。これは政治や経済の問題ではないので、多数決では決められない。こういった仲良しグループは、多数の意見を尊重するのではなく、少数派の意見を大事にするのが常識。多数派の意見を押し通せば、少数派はグループを離れてしまう。

そして最終的にグループはバラバラ。対立やグループの解散に繋が

るので如何に少数派を納得させて、多数が全員になるようにしないとならない。

大和さんの提案を聞いたモロさんと椎名さんは、渋々といった感じ

で返事をした。

「それなら良いけど、もし『ある言葉』を西園寺が言ったら、排除するよ」

殺意すら覚える瞳で俺に威嚇をする椎名さん。どうやら風間ファミリーには禁句タブーがあるらしいな。ま、皆目見当は付くけど。

「よし！ なら決まりだ！！ 伸二は今日から風間ファミリー見習いだー！！」

こうして、今日の金曜集会は風間ファミリー見習い歓迎パーティーとなった。

第十一話 はじめての金曜集会 其の四（後書き）

久しぶりの投稿の御手洗団子です。

いやあ久しぶりすぎてオリ主の伸二の口調を忘れてしまいました。

まあ元々場の雰囲気で口調が変わる奴なので多少はどうでもいいかなあなんて思ったり。

そんなわけで今回ではじめての金曜集会は終わりです。

次回は、お待たせしました、我らがヒロイン辰子の再登場です。
ではまた次回にお会い致しましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4821x/>

真剣で私と戦いなさい!!

2011年11月18日13時18分発行